

## 【第143回生涯教育講座】

## 重複悪性リンパ腫の臨床病理学的特徴

にい の だい すけ<sup>1)</sup> いわ なが まさ こ<sup>2)</sup>  
新 野 大 介<sup>1)</sup> 岩 永 正 子<sup>2)</sup>キーワード：重複悪性リンパ腫, Composite lymphoma, 臨床病理,  
Clinical pathology

## 要 旨

悪性リンパ腫は多様な病因と病理像を示す疾患群であり、治療成績の向上により、初発リンパ腫の治癒後に異なる組織型のリンパ腫が発症する「重複悪性リンパ腫」の報告が増加している。本研究では、長崎県腫瘍登録に収載された12,645件の悪性リンパ腫症例を対象に、Composite型、Discordant型、Sequential型に分類し、重複リンパ腫の頻度と臨床病理学的特徴を検討した。その結果、49例(0.44%)が重複悪性リンパ腫と診断され、欧米の報告に比して頻度は低値であった。大多数はSequential型であり、初発リンパ腫から後発リンパ腫までの間隔は中央値4.3年、初発時年齢は中央値65.2歳であった。組織型の組み合わせとしては、DLBCLとATL、MZLとDLBCLなどが多く、HTLV-1感染の多い地域特性が反映されていた。生存期間中央値は9.5年であり、予後への影響も示唆された。本研究は、重複悪性リンパ腫の全国的疫学的把握の必要性和、長期経過中の新たなリンパ腫発症への注意の重要性を示している。

## はじめに

悪性リンパ腫の90%以上を占める非ホジキンリンパ腫(Non-Hodgkin lymphoma: NHL)は多彩な病因と病理組織像を呈する疾患群である<sup>1,2)</sup>。最近の国際的な疫学調査によると、悪性リンパ腫全体の罹患率に大きな変動はないか、やや減少傾向にあり<sup>3)</sup>、その臨床的予後は多剤併用化学療法

や多様な分子標的薬などにより改善傾向にあると報告されている<sup>4)</sup>。一方日本では、悪性リンパ腫の罹患率は男女共に増加傾向にあり<sup>5)</sup>、さらに近年、悪性リンパ腫の予後の改善に伴い、一人の患者において初発の悪性リンパ腫の治癒後に、初発とは異なる新たな組織型の悪性リンパ腫が発症する症例も増えている。そのような症例の中で、異時性に異なる部位に複数の組織学的亜型のリンパ系悪性腫瘍が発生した場合はSequential lymphoma(連続リンパ腫)<sup>6)</sup>、同時性に異なる部位に複数の異なる組織学的亜型のリンパ系悪性腫瘍が発生した場合はDiscordant lymphoma(不一

Daisuke NIINO et al.

1) 島根大学医学部 病態病理学

2) 日本赤十字社長崎原爆病院 資料保存部

連絡先：〒693-8501 出雲市塩冶町89-1

島根大学医学部病態病理学